

# 地域のがレイクリ ゾート事業を推進

# は じ 土 師 ダ ム



江戸時代、八千代町上・中土師地区は川が土地より低い所を流れていたため、米を作ることができません。中土師に住む忠左衛門はこれを案じ、上流に井手をつくって用水で水を引くことを考えつきました。しかし、周囲の協力が得られないばかりか、捕らえられて手枷、足枷、首枷までされたため喉がつぶれて声も出なくなり、周囲から咽声忠左衛門と呼ばれるありさまでした。それでも彼はノミとツチで掘り続けましたが、残念ながら設計も測量の知識もなく、現在のような機械もないため水路に水は流れませんでした。

三年を迎えた頃、土師氏神の神主が隣村の庄屋五郎右衛門に彼の志を伝え、援助を願い出しました。こうして寛文5年（1665）、江の川の水は長さ6km、幅1.8mの水路に流れ、50haの水田をうるおしました。村人は今までの仕打ちを恥じ、恩人として尊敬し、彼の偉業をたたえました。

これが、ダム管理との調和のもと親水性を高めるレイクリゾート事業の一つ「土師のどごえ公園」の名称の由来です。今も彼の遺徳を讃えた碑は土師ダムの貯水池「八千代湖」を見下ろす咽声神社で人々に偉業を伝えています。

土師ダム建設は昭和41年（1966）に調査を開始し、昭和49年（1974）に完成しました。本体工事着手の昭和45年当時はダムの施工技術が発展した時期で、機械化施工、施工精度の向上がみられ、それまでの施工技術が活かされています。水路建設に苦勞した忠左衛門が知ればさぞや驚いたことでしょう。

八千代湖周辺の魅力は美しい自然です。土師のどごえ公園、芝生広場など水と緑の雄大な空間の中で、サクラ、フジ、アジサイ、コスモスなどが季節を追って次々に咲き乱れ、訪れる人々の目を楽しませてくれますが、なかでもサクラは、開花状況がマスコミや広島駅などで発表されるほど桜の名所として知られています。このサクラは、昭和60年頃から「町民一人一木運動」が展開され、地元の企業の協力も得て植樹されたものです。土師ダム建設時に八千代町の人口が6000人であったことから、町民一人一人のサクラをとの思いで植えられて苗木が育ったもので、現在、桜守プロジェクトなどのボランティアによって手入れされています。

## ■位置図



八千代湖を彩る桜



土師のどごえ公園  
春は桜、秋は紅葉が楽しめ、遊具や芝生広場が広がり、浅い小川では水遊びができる。



リニューアルしたサイクリングターミナル



土師ダム（高さ50m、堤頂長300m、重力式コンクリートダム）  
本体工事に着工した昭和45年はわが国のダム施工技術が発展した時期で、機械化施工、施工精度の向上など、それまでの施工技術がいかされた。